

氏 名（本 籍）	八 木 彌 生 （滋賀県）
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 番 号	博課第406号
学位授与年月日	平成21年 3 月24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間文化研究科
論 文 題 目	日本人女性の乳がん経験に関する研究 ー診療・支援体制と語りの分析を通してー
論文審査委員	（委員長） 教授 佐 野 敏 行 教授 八 木 秀 夫 教授 松 岡 悦 子 准教授 鈴 木 則 子

論文内容の要旨

本論文は、乳がん患者のQOLを向上させる看護やケアのあり方の追究に貢献するために、病気の発見から治療、そして、サバイバーとしての生活に至る一連の経験を、質的に明らかにしようとしたものである。今後ともに進行することが予測されるこの病いの経験の多様化を見通して、日本で生活する女性に、アメリカに移り住んだ日本人女性を加えて調査対象とし、日米における実地調査で得た資料を分析・考察している。

現在、乳がんは、女性のがんの部位別罹患数で第1位となり、しばしば、その医学的対処の進展がメディアに取り上げられ、乳がん撲滅や患者支援のためのピンクリボン運動を通じた早期発見早期治療の啓発が普及しつつある。本論文は、この流れの中で、この病いの経験について質的理解の深化に応えようとするものであり、医療・技術の進歩の一方で、未だに必要とされる乳房切除術を受ける女性にとって、術後の再発・転移の不安と、切除された乳房に付与される女性性、社会性に関わる問題を抱えて生きるものの意味について理解しようとするものである。

具体的に、研究対象者を乳房切除術を受けた女性に限定し、彼女たちが術後術前とほぼ同じように生きるために対処しなければならない2つの課題を、研究枠組みに援用している。第一の課題は乳がんという病いの意味づけであり、第二の課題は回復過程全般を通して、有用な心理・社会的支援を得ることである。これらの課題への対処の仕方を理解するために、本論文ではまず、乳がんの罹患率が日本の数倍であるアメリカでの現地調査を実施し、診療と支援グループ活動を通じた病いに関わる集合的な経験について観察とインタビューによって明らかにしようとした。また、個人の病いの経験

について、日本において7人、アメリカにおいて日本人移住者8人の女性にインタビューし、病いの経験がどのように構築されているのかを明らかにしようとした。

本研究論文はⅦ章で構成される。

第Ⅰ章序論では、研究の背景と目的、研究の具体的課題と意義、用語の定義、方法、先行研究の検討、本研究論文の構成を述べている。人間は「自分自身がはりめぐらした意味の網の中にかかっている動物」だとするギアーツ『『文化の解釈学』1987』と、「全ての病気は回復過程である」とするナイチンゲール『『看護覚え書』1875』に依拠し、乳がん女性には回復期に病いをどのように意味づけるのかという課題と、回復期全般を通して有用な心理・社会的支援を得るという2つの課題を想定し、研究課題として取り上げる必要性について説明している。

第Ⅱ章は、人間の体表にある極めて単純な器官としての乳房が、がんの侵襲を受けることで女性たちにどのような苦悩が生じるのか。それを導き出すために、乳がんに関わる身体性、病気観、社会性について、文献及びインタビューでの語りを基に論述している。

第Ⅲ章では、日本とアメリカで暮らしている乳がんを経験した女性たちが、診療機関と支援グループにおいて、どのような経験をするのかについて述べている。2005年の調査時の日本における乳がんの診療状況と、1998年から6年間で4回実施した現地調査をもとにしたアメリカにおける乳がんの診療状況について述べている。また、1996年から関与してきた日本の乳がん患者会の状況と、アメリカ調査で知見を得た乳がん患者のサポート活動の現状について記述・論考している。

第Ⅳ章と第Ⅴ章はともに、語りの分析の章で、乳がんに関わる身体性、病気観、社会性とともに、乳がんの診療と支援経験とを関連させながら、乳がんをどのように意味づけているのかを論述している。

第Ⅳ章では、日本人女性7人の乳がん経験の語りをもとにして、まず、経験の語りから12の鍵となる表現を抽出している。それを分析して、病いの経過には回復期に向かって3つの段階がみられることを見いだした。さらに、経験の特徴は、乳がんに関する認識の薄さ、自らの乳房の異変の解決より家族の問題の解決を優先させる、診療時間の短さ、解説書の少なさなどがあり、患者会という集団への帰属により心理的安定が図られていることを明らかにしている。

第Ⅴ章では、アメリカ在住日本人女性8人の語りをもとにして、抽出した13の鍵となる表現の分析を行い、3つの段階の存在を見いだした。特徴的な経験として、罹患率の高さが影響しての乳がんに関する強い認識、懇切な診療と詳細な解説書、家族の結束の強さ、入院期間の短さ、さらに英語という言語的問題が存在することであり、これはサポート・グループへの参加機会の少なさに影響を与えていると考えている。女性たちにはアメリカ社会における周辺人であることからパワーが生じ、それを使って複雑な困難さに対処していると考えている。どのインタビュー対象者も病いへの思いを日本語で言い切る機会を必要としていたことをとらえて、トランスカルチュラルな場に生きることの困難

さの一側面を明らかにしている。

第Ⅵ章は、今後の同様の研究のための試論的な章である。乳がんを病むことにかかわる研究者の経験として、筆者が外科病棟および看護基礎教育機関に勤務していた時に、乳がん患者および乳腺専門医から聞いた乳がんに関わる思いや解釈について、自らの記録を基に述べている。これまでこうした種類の資料は研究に使われることがなかったが、乳がんを病むことの意味を解釈するために、できるだけ多様な資料を積極的に用いることの可能性を試論的に明らかにしようとしている。

第Ⅶ章は全体の結論として、本研究の課題である、乳がん女性たちが病いをどのように意味づけながら生きているのか、そして、回復過程全般を通しての有用な心理・社会的支援とはなにかを議論している。乳がんを経験したことについての意味づけは、日本とアメリカ共通の鍵となる表現である「私は変わりました」にあらわされていたと主張し、彼女たちの裡なる変化は、「私のからだの主人は私」、「死の病いを越える力は私自身に備わっていた」という力強い表現にあり、乳がんの経験は女性たち自らが変化し再生するための通過儀礼だと論議している。また、女性たちは、有用な支援を身近な家族とともに、患者会やサポート・グループなど同病者集団から得ていることから、各自の取捨選択に適う多様な支援活動、特に東西統合医療に基づく支援活動が必要であるという結論を提示している。

論文審査の結果の要旨

本研究は、人間の生活を脅かす疾病のうち、罹患者数が増加の一途をたどる乳がんを取り上げ、日本人女性がこの疾病に関連した経験をどのように捉え、意味づけているかを質的に明らかにしようとしたものである。現在、乳がんは、女性のがんの部位別罹患者数で第1位となり、しばしば、その医学的対処の進展がメディアに取り上げられ、乳がん撲滅や患者支援のためのピンクリボン運動などによる早期発見早期治療の啓発が普及しつつある。本論文は、こうした動きの中で、この病いの経験の質的な理解の蓄積と深化に応えようとするものであり、医療・技術が進歩しながらも未だに必要とされる乳房切除術を受ける女性にとって、術後の再発・転移の不安と、切除された乳房に付与される女性性や社会性に関わる問題を抱えて生きることの意味についての理解をもたらすものである。総じて、本論文は乳がん患者のQOLを向上させる看護やケアのあり方の改善・向上に貢献する研究となっている。

本研究は、この疾病の発見から、各種の治療を受け、回復期を経て、さらに再発のリスクの終わりが無い生活の維持に至る一連の過程を「病いの経験」と捉え、日本における経験の特徴を、アメリカにおけるそれとの対照を通して、浮かび上がらせる手法をとっている。具体的に、日本とアメリカにおいて現地調査を行い、診療と支援グループ活動を通じた病いに関わる経験を観察と聞き取りによって明らかにし、また、個人の病いの経験について、乳房全摘手術経験者（日本において7人、アメリカにおいて日本人移住者8人）へのインタビューにより収集した語りを分析して、病いの経験がどのように構築されているのか明らかにしようとした。本論文の特徴は、この分析において、個人的な経験の語りのなかにある「鍵となる表現」を抽出し、身体観、病気観、家族や同病者との関わりを含む社会性の脈絡の中で、また、乳がんの診療と支援経験との関連の中で、女性たちが乳がんをどのように意味づけているのかを丁寧に明らかにしようとした点にある。

次に、本論文各部ごとの審査概要を述べる。

第I章序論で説明されている本論文の基本的な研究枠組は、その中心に「全ての病気は回復過程である」とするナイチンゲール『『看護覚え書』1875』の考えを置き、この過程における人間を「自分自身がはりめぐらした意味の網の中にかかっている動物」とする文化人類学者ギアーツ『『文化の解釈学』1987』の視点を取り入れている。この枠組は、論文提出者が長年、看護学領域の研究教育に携わってきたことに裏打ちされた専門的職業人としての経験を積極的に活かしながら、病いや健康に関わる応用研究に新たな視点を取り入れて進展させる試みとして高く評価できるものである。本論文の問題設定として提示された二つの課題は、回復期に病いをどのように意味づけるのかという課題と、

回復期全般を通して有用な心理・社会的支援をどのように得るのかという課題であり、これらは、実際に、乳がん女性の生き方に実践場面で触れてきた経験をもとに設定されていることから生活経験に密着した課題を扱う応用研究として適切なものである。

第Ⅱ章では、古来から現代に至るまでの乳房の文化的社会的な位置づけについて文献をもとに跡づけを行った上で、この身体器官をめぐる身体性や社会性の特性を明確にしている。これは、後章で扱う、人間の体表にあるひとつの器官としての乳房がもたらす問題、とくに、がんの侵襲を受けることで女性たちにどのような苦悩が生じるのかの問題の論議の説得性を高めるためだけでなく、問題の深さ広さを示すのに適切な内容となっている。

第Ⅲ章では、乳がんを経験した女性たちのための診療と支援のあり方を、日本とアメリカにおいて実際に観察し、聞き取りを通してどのようなしくみで、診療と支援が行われているのかを明らかにしている。病いの経験が実際にどのような環境で行われるのかを明確に把握するために、通常、当事者以外の人々には実態を知る機会がないことから、乳がんの女性たちの語る経験がどのような場で実際に経験したことを話しているのかを理解するために必要な情報を提供する章となっている。具体的に、調査対象地における精力的な現地調査（1996年以降の日本での調査と1998年からの6年間で4回のアメリカにおける調査）において得られた資料をもとに、診療機関と支援グループの設備や体制と、当事者・従事者の活動方針や行動様式について日本とアメリカの間の対照点・類似点を明らかにすることで、乳がんを経験した女性たちをとりまく社会文化的環境の特徴を描きだすのに成功している。とくに、日本の乳がん患者会の状況と、アメリカで調査した乳がん患者のサポート活動の実態が、同病者集団が受ける支援の経験という視点から丁寧に論述されていることは評価に値する。

第Ⅳ章と第Ⅴ章は、日本人女性たちの語りの分析と、個人の病いの経験について論述を行っている章で、第Ⅳ章は日本でインタビューした7人、第Ⅴ章はアメリカでインタビューした移住後に乳がんを経験した8人を対象にしている。分析は、両国での個人的な経験の語りのなかにある「鍵となる表現」を抽出し、乳がんに関わる身体性、病気感、社会性と、乳がんの診療と支援経験と脈絡の中で、乳がんの意味づけの仕方を明らかにしようとしたもので、評価できる。しかし、病いの経験の文化社会的な脈絡付けについては、まだ追求すべき点が散見され、今後の課題となっている。

病いの経験の語りから分析的に抽出した鍵となる表現については、日本で生活する対象の語りから13、アメリカで生活する対象から14を抽出し、各々について論考している。ここでは個々の論考については省略するが、とくに評価すべき点として、同病者集団である乳がん患者会関連の表現についての論考があり、患者会は、ターナー [1976] による「リミナリティ」にある「コムニタス」だと考えることができると的確に指摘している点、ある程度の期間を経て安定期になり、病いに対する考え方に変化がみられることを捉えて通過儀礼の概念の適用によるまとめを行っている点が挙げられる。また、アメリカにおける日本人女性の経験について、回復過程を歩んでいるときに健康者からは離脱し

た存在として、また、アメリカ人でもなく日本人でもないという自己認識のもとに、アメリカにいな
がらその周辺部に在る者としてのパワーが生じていることを語りから分析的に論考している点が注目
に値する。

第Ⅵ章は、これまで扱ってきた資料とは異質の資料を使用して、乳がんを病む経験について理解を
深めることに資することを目指した章である。ここでの資料は、論文提出者が外科病棟および看護基
礎教育機関に勤務していたときに、乳がん患者および乳腺専門医から聞き取りした乳がんに関わる語
りを、個人的記録として残したものである。調査研究で収集した資料を補完する目的で、職業上の経
験から得た記録を研究に用いることは前例がみられず、そうした記録の質的研究への貢献の可能性を
示す試みとして評価に値する。

第Ⅶ章において、全体の結論を述べている。本研究の課題である、乳がん女性たちが病いをどのよ
うに意味づけながら生きているのか、そして、回復過程全般を通しての有用な心理・社会的支援とは
なにかを検討しながら、乳がんを経験したことについての意味づけとして、日本とアメリカ共通の鍵
となる表現である「私は変わりました」を取り上げ、「私のからだの主人は私」、「死の病いを越える
力は私自身に備わっていた」という表現で示される内なる変化の自覚が、乳がんを経験した女性たち
が自ら再生するための通過儀礼として捉えることができると論議した点は的確であるといえる。また、
女性たちは、有用な支援を身近な家族とともに、患者会やサポート・グループなど同病者集団から得
ていることから、各自の取捨選択に合う支援活動の多様化と、その一つである東西統合医療に基づく
支援活動の必要性の指摘は、今後の病いの経験の支え方におおいに示唆を与えるものとなっている。

本論文の一部はすでに、学術雑誌において2つの単著論文、および、5つの共著論文として公表さ
れている。なお、共著論文については質的調査研究を分担する共同研究者としてのものであり、本論
文の内容との関連が強いものである。よって、本学位論文は、奈良女子大学博士（学術）の学位を授
与されるに十分な内容を有していると判断した。